



できごと

平成 18 年 10 月 16 日～18 日、国際子ども図書館主催の「児童文学連続講座 - 国際子ども図書館所蔵資料を使って - 」が開催されました。この講座は、図書館等で児童サービスに関わる職員を対象に毎年開催される講座で、本年は「絵本の楽しみ - イギリス絵本の伝統に学ぶ - 」という総合テーマで、イギリス現代絵本の流れを追って、イギリス絵本の諸相を具体的に探ってみようとする内容でした。

吉田新一氏、三宅興子氏、灰島かり氏、藤本朝巳氏の 4 人による、絵本をスクリーンに写しながらの講義に加え、国際子ども図書館の児童資料や取り組みについての紹介等もありました。

(裏面にて、2 つの講座を紹介します。)

子ども図書研究室のテーマ展示

ただいま展示中です!

「まめ・マメ・豆の本」

静岡県読書ガイドブック『本とともに』おすすめ本
第 18 回読書感想画中央コンクール指定図書
新着図書も常時展示中です。

イベント情報

第 7 回子どもの本 この 1 年を振り返って 2006
図書館員や児童図書研究グループからの代表者たちが、今年話題になったイチオシの本を発表します!

会場：東京都渋谷区代々木神園町 3 番 1 号

国立オリンピック記念青少年総合センター センター棟 102

開催日：平成 19 年 1 月 26 日(金)

参加費：3,000 円 定員：180 人

主催：NPO 図書館の学校

(電話：03-3943-0666、Web：<http://www.toshokan.or.jp>)
詳細内容や申込方法は、参加申込書もしくは Web ページをご覧ください。

新着図書から

絵本

『はっぱじゃないよ ぼくがいる』

物語

『永遠の友だち』



森をあるけば 1
姉崎一馬 / 文・写真
アリス館
2006 年 9 月



サリー・ワーナー / 著
山田 蘭 / 訳
角川書店
2006 年 8 月

葉っぱにあいている穴は、よく見ると目や口に見えることがある。そして何か話していたり、泣いたり笑ったりしている顔に見えることも。「ここにいるよ」と呼んでいる葉っぱに気づいて目が合ったら、もうそれは普通の葉っぱじゃない、特別な「ぼく」と「わたし」。

オオカミコウモリの葉のうれしそう顔、ツルアジサイの葉の暑さにあえぐ表情には、思わず楽しくなる。草むらや落ち葉の中で待っている友達を、今すぐ見つけに出かけたくなる写真絵本。【幼児から】 (宮崎)

ケイディの幼い頃からの親友ナナはガンに侵されていた。確実に迫ってくる死を見つめながら、2人は共に過ごす。家で療養中のナナを残して1人中等部へ進み、新しい友人ができたケイディは、罪悪感を抱く。2人はぶつかり合いと和解の後、ハロウィンの日にささやかな、そして最後の冒険をする。

思春期の少女の気持ちや友情・人間関係を描いた作品。同様に友人の死を扱いつつも少年達を中心に描いた『僕らの事情』(No.21で紹介)と読み比べても興味深い。【中学生から】(殿岡)

児童文学連続講座の中から、2つを紹介する。

チャールズ・キーピング(1924~1988)

(講師:三宅興子氏)

梅花女子大学大学院教授)

1960~70年代にかけて第二の絵本黄金時代を代表する絵本作家のひとりである。デッサンの確かさ、リトグラフの技術にすぐれ、18冊の絵本やサトクリフの挿絵なども多く手がけた。絵本『*Charley, Charlotte and the Golden Canary*』(Oxford University Press, 1967)(日本語版『しあわせどおりのカナリヤ』よごひろこ/やく らくだ出版)でケイト・グリナウェイ賞を受賞した。

彼の絵本に対する評価は2つに分かれる。「子どもばなれ」「物語が弱い」として評価が低い一方、「絵本は幼児だけのものではない」「自己表現としての絵本」として高い評価を受けている。しかし、『*Through the Window*』(Franklin Watts Inc, 1970)の翻訳本、『まどのむこう』(いのくまようこ/やく らくだ出版)が日本で出版された時、あまりにも孤独な男の子を表現していたので、ほとんどの図書館で拒否(選書で選ばれなかった)された。子どもに手渡す人のところで断たれてしまったのである。

その後、『*Railway Passage*』(Oxford University Press, 1974)(日本語版『たそがれえきのひとびと』わたなべひさよ/やく らくだ出版)では日常の異空間をきれいに描いた。晩年には、セピア色の濃淡で工夫、色の制限の中で遠近を出す手法を用いて、物語詩『*The Highwayman*』(By Alfred Noyes, Oxford University Press, 1981)で2度目のケイト・グリナウェイ賞を受賞した。ロンドンの子どものたちの評価では、ヤングアダルト向きの絵本とされている。

シャーリー・ヒューズ(1927~)

(講師:灰島かり氏 翻訳家)

英国を代表する絵本作家のひとりであり、英国では最も尊敬され愛されている。批評家の評価も高い。今でも新しい絵本が出ている、79歳の現役作家である。

これほど人気の作家であるのに日本ではほとんど知られていない。翻訳絵本も、代表作でありケイト・グリナウェイ賞を受賞した傑作『*Dogger*』(Bodley Head, 1977)(日本語版『ぼくのワンちゃん』)1冊だけである。その理由は、イギリスの文化や国民性が日本人にとってはわかりにくいためだと思われる。作風は、日本の作家でいうと林明子に近いものがあり、同じ年頃の少女を描いているので比較してみると、色彩や子供の描写から英国と日本の好みの違いがわかる。ヒューズの絵の色彩が全体的に茶色(渋くて重い色:イギリス的)であるのに対し、林はおだやかな色彩である。また、子ども観においてもヒューズは「子どもの成熟を尊重する」という姿勢が強いのに対し、林には「小さなものをいとおしむ」という姿勢がかいま見られるのである。

最近では、75歳で書いた『*Ella's Big Chance*』(Bodley Head)で、2003年、2度目のケイト・グリナウェイ賞を受賞した。

所蔵資料から

絵本



『ぼくのワンちゃん』

シャーリー=ヒューズ/さく

あらいゆうこ/やく

偕成社

1981年12月

いつも一緒にぬいぐるみのワンちゃんが行方不明になってしまい、家族みんなで一生懸命捜すが、どこにも見つからない。なんとそれがお姉ちゃんの学校のバザーの売り場に...

子どもの日常の生活と心の動き、家族の暖かい思いが伝わる絵本。

(澤野)

*表紙画像はすべて出版社の許可を得て掲載しています。